

記憶に残る，代ゼミ夏期講習で聴いた 数学者・矢野健太郎の講義

A memorable lecture by the Mathematician Kentaro Yano
at the summer course at Yoyogi Seminar School



川村 知一*

Tomokazu KAWAMURA*

はじめに

私はここ数年アナログレコード鑑賞に凝っている。デジタル音とは異なる艶やかで繊細なアナログ音を聞くたびに、私が浪人生であった昭和35年、開校間もない代ゼミの夏期講習で聴いた、数学者・矢野健太郎の特別講義の光景を思い出す。

代ゼミ夏期講習

昭和35年(1960年)、私は浪人生で自宅から5分、市ヶ谷駅の堀向こうにあった粗末な木造2階建て校舎「城北予備校」に通っていた。

風の便りで、「代々木に新しいビルの予備校ができて(代ゼミ)、冷房完備で女子浪人生がいるらしい」という情報が入った。

当時の大学進学率は11%程度、学校の教室に冷房など無縁で、女子浪人生などと言う単語はまだ珍しい時代であった。

気分転換で夏期講習は「代ゼミ」に通ったところ、1時間だけであったが、数学者、矢野健太郎の特別授業があった。

1本の直線と数字

背広姿のスマートな先生が現れて授業が始まると、先生は真新しい横長の緑板に、チョークで3mほどの1本の横線を引き、0~10の目盛を振った。次に生徒たちに1目盛りの間を数字で埋めさせていくのだが、数字では埋め尽くせないことを示し、「穴だらけである」というのが結論であった。

当時、アナログ、デジタルなどという外来語は、まだ社会一般に認知されていない時代であった。

受験の数学を期待していた受講生にとって、多分に拍子抜けする講義であったが、先生は(アナログの)直線は(デジタルの)数字では埋め尽くせないことを具体的に教え、アナログとデジタルの違いの本質を教えて下さり、素晴らしい企画の講義であったと思われた。

デジタル化の趨勢だが

“艶やかで繊細な”音色のアナログ音を聞くと、CDのデジタル音は澄んだ音色ではあるが“サラリ”とした軽さを感じてしまう。

デジタル化したテレビでは、液晶にしる、プラズマにしる、

画素数は向上したが、反応速度、色の階調、白トビ、黒ツブレの点では、かつてのブラウン管の画質に及ばない。

アナログ、デジタルの違いを見分け、聴き分ける、有機物質でできた人間の“目”、“耳”の性能は驚異的である。

現在、音響、映像のほとんどがデジタル化されてしまったが、アナログレコードの音質が優れている理由は、“デジタルは穴だらけ”の本質を思い出すと理解できるような気がする。

参考

矢野健太郎(1912~1993年)をネットで調べると

「小学生の時にアインシュタインが来日し、相対性理論に関するニュースを聞いたのが数学を専攻するきっかけになった。相対性理論を理解するには微分幾何学を理解しなければならない、ということで1936年パリ大学に留学、戦後はプリンストン高等研究所で研究を行った。また同高等研究所にいたアインシュタインと親交を深めた。矢野をそのまま英訳すると、Vector Field(ベクトル場)という意味だと言って、アメリカの研究者達を驚かせた。」とある。

先般、箱根宮ノ下富士屋ホテルに行った時、かつて宿泊したチャップリン、ヘレンケラー、蒋介石などの有名人の写真・記録があり、蒋介石直筆の色紙に並んでアインシュタインの直筆があった(図1)。

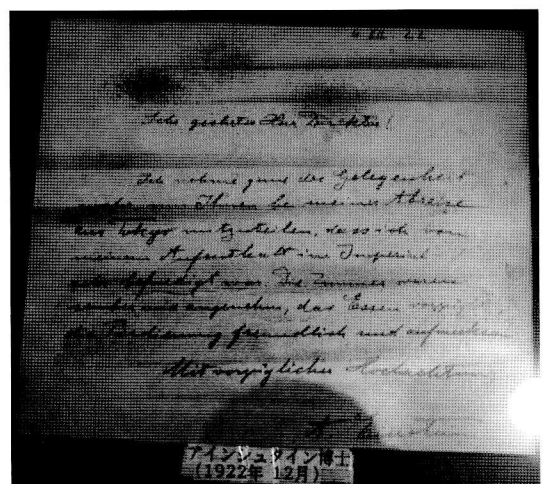


図1